

(二〇二〇 国グ後)

# 小論文

- ・問題は1～7ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

**注意** 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二〇〇点

次の文章を読んで、あとの問一〜問三に答えなさい。

著作権保護の観点から、  
問題は掲載していません。

著作権保護の観点から、  
問題は掲載していません。

著作権保護の観点から、  
問題は掲載していません。

著作権保護の観点から、  
問題は掲載していません。

# 著作権保護の観点から、 問題は掲載していません。

出典 荻野昌弘「戦争と社会学理論―ホモ・ベリクスの発見」(好井裕明・関礼子編『戦争社会学』明石書店、二〇一六年)より、  
一部省略・改変した部分がある。

注

- 1 ミシエル・フーコー(一九二六～一九八四年)——フランスの哲学者。
- 2 トーマス・ホッブズ(一五八八～一六七九年)——イギリスの哲学者。

3 エミール・デュルケーム(二八五八〜一九二七年)——フランスの社会学者。デュルケームの社会についての公準Ⅰ・Ⅱとは、筆者のまとめによれば、「公準Ⅰ 共通の信仰(集合意識)をもつ社会が存在する(個人の結合が社会を生むのではない)、公準Ⅱ 社会は自律的に発展する」である。

4 『シャルリー・エブド』——フランスの風刺画を中心とした週刊誌。ムハンマドを風刺する絵を載せたことにより、二〇一五年一月七日にパリにある編集部がイスラム過激派により襲撃され、編集長や警察官を含めて十二人が殺害された。

5 マグレブ——モロッコ、アルジェリア、チュニジアなど北アフリカ西部のアラブ諸国の総称で旧フランス領が多い。

6 アルジェリア独立戦争(一九五四〜一九六二年)——フランス領だったアルジェリアが独立を目指して起こした戦争。最終的にフランス側が一九六一年の国民投票で独立を認め、一九六二年にフランスと和平協定を締結した後、独立した。

7 ジハーディスト——イスラム過激派のテロ実行者を指す言葉として欧米メディアで使用されている。「ジハード」はアラビア語では「努力、闘争」を意味する。

8 イスラム国——ISIS、ISIL、ダークイッシュとも言う。イスラム過激派組織がシリア、イラクの一部を武力制圧して、「国家」樹立を宣言していたが、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、イラク、シリア軍等との戦闘を経て、二〇一九年三月までにシリア、イラクから一掃された。

問一 本文中に二箇所ある傍線部(ア)の「根本的矛盾」とはどういうことか、本文の内容に即して、一〇〇字以内で説明しなさい。  
(配点三〇点)

問二 傍線部(イ)で「両義的存在」とあるが、どのような意味で両義的なのかを説明した上で、それに着目することがなぜ「不可欠」なのかを二五〇字以内で説明しなさい。(配点五〇点)

問三 筆者は「シャルリー・エブド襲撃事件」を現代社会におけるどのような課題の一例として取り上げているのかを、旧宗主国と旧植民地、あるいは移民とその受入国の関係に注目した上で説明し、筆者のそうした認識に対して、もし自分がその「両義的  
他者」だとしたらどのように考えるか、この文章で言及されていない他の事例を取り上げながら、一〇〇〇字以内で論じなさい。(配点一二〇点)